



すみ や つとむ
角 谷 勉

湯沢高原の契約を再更新したが 求められているのは今後の方向性では

收支計画の営業利益が
少額では

問 SRS（スノーリゾー
トサービス・湯沢高原
運営会社）との新契約が
結ばれ、過去5年間の
実績と累積赤字が確定
し、今後の収支予測も
SRSから提示された。
多角的に分析し、契約
更新時まで、行政と議
会と町民が共通認識の
もと、湯沢高原の方向
性を確定することが大
切と考える。SRSの
実績では単年度の平均
営業赤字は約2500
万円である。新契約では
施設利用料4000万
円、借地料2500万
円、リフト整備費等

SRSの法人税を 町投資額の回収へ

問 SRSの計画では、
初年度より利益が出、法
人税の支払が発生する。
町は5年間で7億以上
の投資を行ない、SRS
にはその投資額の回収
義務はない。SRSの法
人税（5年間で5500
万円）の支払について、
町の投資額が少しでも
回収出来る方法を検
討すべきと考えるが。

答 SRSと協議し、節
税対策を検討する。

精度の高い季節ごとの 収支を

問 SRSの実績による
とスキーシーズンは5
年間黒字で、夏シーズ
ンは5年間赤字であ
る。布場もファミリーゲ
レンデを借地している
にもかかわらず、借地
料の経費按分は夏が
65%で冬が35%である。
今後の収支計画でも借
地料・利用料の経費按
分が夏が75%、冬が25%

である。今後の方向性
を検証するにあたり、精
度の高い季節ごとの収
支が必要と考えるが。

答 会計処理を発生主義
で行なっていることも関係あ
る。とのこと。冬の経費、夏
の経費の分類がどこまで可
能かSRSと検討する。

湯沢高原の収支 はSRS全体で

問 SRSは湯沢高原の
営業を行うことによ
り、自社にメリットがあ
ると判断したので引き
受けたと考える。5年
間で湯沢高原の営業赤
字は7900万円、
SRSの岩原事業所の
営業黒字は7600万
円である。岩原事業所
の人件費は湯沢高原の
営業を引き受けた1年
目から前年比で33%
（2400万円）減額に
なっている。岩原事業所
の収支に、湯沢高原が
貢献していると考え
る。累積赤字を確定するに
あたりSRS全体で考
慮すべきではないか。

答 湯沢高原の赤字を
SRSに押し付けるのではな
いという立場で再契約を締
結し、営業赤字7900万
円、未償却資産2400万
円、計1億300万円を累
積赤字と確定した。

答 湯沢高原の赤字を
SRSに押し付けるのではな
いという立場で再契約を締
結し、営業赤字7900万
円、未償却資産2400万
円、計1億300万円を累
積赤字と確定した。

スキー場運営委員会の 現状と役割は

問 「湯沢高原スキー場
運営委員会」が発足し
たが活動実績と今後の
役割はいかに。

答 運営者に提言及び助
言を行っていただく。すで
に3回開催し活性化や事業
計画について多岐にわたり
提言を頂いている。

問 現在の運営委員会の
メンバーは町民の方が4
名。人格者であり見識
が高いことは承知してい
るが、3名は温泉街で商
売をされており、他の1
名は布場スキー場の地
主さんである。今後、湯
沢高原の方向性や、布場
スキー場の存続について
の議論において、町民の

代表者が直接の利害関
係者ばかりでは町民にか
たよった人選と映りかね
ないがいか。

答 運営規定では「主たる
団体の長の推薦と」なってい
る。結果、現在のメンバーと
なった。人選については次の
改選のときに検討する。

投資計画に伴う事業計 画の進捗状況は

問 トリプルリフトとポプ
スレリフトの整備費及
び今年の再整備費計5
億2000万円の予算
が通つたら、投資計画に
伴う事業計画をスキー
場運営委員会や湯沢町
観光振興計画のなか等
で検討し、提示するとし
ていたが進捗状況は。

答 湯沢高原の整備は計画
にのっとり順調に進んでいる。
冬は「高所スキー場」として
夏は「雲の上の花公園」とし
て営業に力を入れていく。
今後、投資計画に基づく
売上予測等、事業計画案
を策定し提示する。